
ANGEL&HUMAN

fuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ANGEL&HUMAN

【Nコード】

N4608U

【作者名】

fuki

【あらすじ】

夏休み初日の夜の世界、平凡な人間は天使と出会う。

だが、己の持つ天使のイメージと反して自己中、破廉恥、我が儘の三拍子が揃っていた俺様天使だった。よく「淡泊」と言われている人間こと高校生の私ですが、そんなキャラ設定も放りだし「天使のイメージを返せ！」そう叫びたくなった夏の日の物語。（転載、それいけ魔王さま！と雀の涙くらいリンクしますが単品でも読めます）

ありがとう、優しい世界

「大勢の人が死にました」

だなんて、自然の破壊者が減って良いことだと私は思う。だけどその反面、酷くやるせなくて大きな声をあげて泣き出したいのもまた事実。ああ、なんというパラドックス。

トーストを嚙りながらボタンを押すとテレビの画面が暗黒を映しじわりと苦い味が口の中に広がった。

その日はちょうど夏休み最初の夏の真夜中のことだった。

祖父母が前に住んでいた古家で過ごすことになった私は、夏休み初日に宿題を少しでも早く終わらせ、

復習をしなければという一種の責任感を背負いながら青い数学のノートをあけていた。

しかし、あまりにも多い問題に大きく溜息と悪態をつき即座に諦め、飛んでいる小さな羽虫の隙について机におかれた少し古びて薄く埃を被っている電気スタンドのスイッチを回そうと手を伸ばす。

私は見つけた。

開けていた窓の棧に満月の光の雫を纏って座っていたそれを。

そよ風がその髪をふわふわと揺らす。トルマリンのような翠色の瞳を猫のように細めると、うつすらと笑みを浮かべ、口を開いた。

「よう、人間。俺様は天界の天使だ。少しの間だけこの世界で匿え。ちなみに拒否権は無え」

「・・・・・・・・」

・・・・取りあえず、すぐにカーテンを閉めた。

いやはや私はどうやら疲れているようだ。昨日終業式の後に慌ててこちらに来る準備して不便な古家で生活を始めたからに違いない。・・・・ついに幻覚とやらを見るようになるとは。

くらりとする身体を必死に押しとどめ手で目をこすった。それから5分くらい経っただろうか、いざとなったら警察を呼ぼうと変な意を決した私はカーテンの端を掴んで勢いよく開けてみた。

ざあっとレールがこすれる音がしていつでも逃げれるようにと一歩足を下げた、のだけれども。

「・・・・・・・・あれ。」

ただ夏の夜にふさわしい光景が映っていただけだった。なるほどこれが白昼夢。いやに納得してタオルケットの中に頭ごと私は潜り込み身体をまるめるようにして眠った。

のちになって、なぜこのときちゃんと警察を呼ばなかったんだろうと後悔することになるなんて私には知る由もなかった。

翌朝、蝉の鳴き声によって起こされた私はよろよろと立ち上がって、障子を開け、縁側に出た瞬間に口をあんぐりと開けることになった。私の混乱の原因は、ふわふわの金色の髪を揺らしてこちらを向いてから口を指さした。

「垂れてるぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

とりあえず、寝惚けた頭で現状把握する前に袖で口を擦るように拭くと昨日見たそれ、即ち自称天使不法侵入者は端整な顔をニヤリと歪め冗談と宣った。

あー。こんなの昨日、白昼夢で見た気がするなあ……。つつか、何こいつ。え、なんでここにいの？

不法侵入？ありえなくね。ああそれともまだ寝てんのか私。

無意識に私が半眼で睨むと、不審者はきよとした顔をしてからケラケラと笑って縁側に座り込んだ為に私の眉間に皺がよった。

「何で此処に居るかって思ってたんだろ？感謝しろよ人間。なぜなら天使である俺様がわざわざ人間の目の前に降りてやったんだからな」
「・・・・・・・・・・」

とりあえず私はだんまりとしたまま、そいつの横を通って洗面台に向かうことにした。鏡に映った自分を無心に眺めてから、蛇口をひねって水を出し、両手で零さないように水を溜めて、顔へと押しつけると冷たい水に肌の毛細血管が縮まってぴりりと反応をみせた。

冷たさに段々ぼやけていた頭がすつきりと晴れていく。

ふわふわのタオルで残った水気を吸い取り、ふうと溜息をつくと突如耳元で声がして思わず眼をあけて飛び上がった。

「へえ。水ってそんな細つちろいもんから出てくんだな。人間、何でこんなものから水が出てくるんだ？」

ぱつと避けるように身体を後退させつつ振り返ると子どものようなきらきらと輝いた翠色の綺麗な瞳と目があった。その瞳は今度、興味津々な様子で元は銀色だっただろうが今は鉛色の蛇口へと滑らされた。

あれ、なんかいる。つか何この人本物？あー、さっきのマジもん？めんどくさいな……。なんだ、まずは警察？それとも精神病院？

私は、朝のテンションの低さも相まって何か色々と諦めた。

見た目は麗しいこと限りないが不法侵入者が吐く嘘に俺様って天使なんだぜ！っていう選択肢があるんだとか、アンタみたいな天使はいてたまるかとか、私は全てを諦めた。

女は愛嬌。だけどお前はそんなないから度胸でどうにかしろ。そんな言葉を神から告げられた気がした。

蛇口のコックを捻って水を止めるとさらに興奮しだした。自分でその興奮を抑えているようだが抑え切れていない。手をだしたりひっこめたり。なんというか、その、言い方は悪いが、身悶えているよ

うな感じだ。

正直その顔で身悶えないでほしい。服もローマ風味だしマジ変態にしか見えん。

私は大きな溜息をわざとつき、可哀想な人を見る目でそいつに顎でしゃくつて蛇口の方を指し許可をだすと待ってましたと言わんばかりに嬉々としてコックを捻った。

勢いよく水が飛び出してきたので一瞬慌てた様子だったがもう一度、捻りなおし水を止めた。それを5回繰り返したくらいで私は水道代がかかると思いコックを奪い捻った。非常に嫌そうな顔をされたがそんなの知らん。

この不法侵入者、相当蛇口見るの久しぶりだったのだろうか・・・？

「んで人間、人間は今から何をするんだ？」

不法侵入者は私の後ろを大きい犬のようについてきてはそう問いかけてきた。私はいつも朝にパンを食べると、すぐに机へと向かう。もちろん此処に来てからだってその習慣を変えることはない。

あんたは淡泊だね、と言われるのはもう慣れた。

鞆に仕舞っておいた勉強道具を取り出すと、不法侵入者は鼻で笑ってから木目の長いものを使ってできた縁側に座り込み手入れが行き届いていない庭の小世界を眺め始めた。

そんな様子をちらりと視界に入れてから私は目の前の課題を終わらせることに専念したが、あいつの方に気が行ってしまう。

それはそうであろう。だって不法侵入者だ。実はナイフを隠し持っていて、後ろからぐさりなんて落ちも考えられるからだ。この古屋に金目の物なぞない。まあ、その時になったらその時考えればいい。

・・・別に生に執着してる訳でもないし死を望んでいる訳でもない

というか実際、古屋に移ってから時折近所の人とかがいつのまにか家にいて寛いでるくらい田舎だし。ぶっちゃけ田舎っぺは不法侵入者には慣れているんだ。

そういえば、この古家の主であつた祖父もそこに座っているのが好きだつたような気がする。

小さい私は、祖父のごつごつな膝の上に乗つては、一緒に小世界を眺め、こっそりと祖父を見上げるのが好きだつた。いつも祖父は気づいて私に視線を下ろし、目尻の皺を寄せて優しく眼を細め柔らかく微笑んでくれたからだ。　酷く温かい空気にくるまれてた。

シャープペンシルを走らせる手を少し緩めながら、不法侵入者の背中に、あの優しい空気を感じ取った直ぐ後に訪れた現実で疑問に思つたことを何となくぶつけてみた。

後から考えてみると、

初めて会つたのにどうして聞いたんだろうつて不思議に思つた。で

もきつと、こいつの纏ってる雰囲気はどこか、違っていると、無意識に感じ取っていたのだろう。

「・・・生きていた、その時までが苦しいのか、それとも死ぬ一瞬が苦しいのか。どっちだと思う？」

それは、生きている限り付き纏う永遠の謎

（答えを得ることが出来るのは、最期の一瞬だけで）

「人間にとつての永遠の謎だなそりゃ。悪いが俺様は死んだことがないから答えられねえ」

不法侵入者はこっちに背を向けたまま答えた。

そつと開いている襖の向こう、もうその答えを見つけた人の枕元で、身動きもせずに座っていた祖母。何かを呟き、両の瞳を閉じた祖母。縁側に座り込んで小綺麗な小世界を眺めていた私と誰かの世界の終焉を意味するかのように風鈴の静かな音が響いていたような気がする。

風に乗って微かに届いた、あの祖母の呟きは一体なんだった・・・？

そこで思考を中止させ、頭をふった。

「そつ」

興味なさげに、そつ返答をすると、何かごちゃごちゃと喚いたが私は、ひたすらに課題と闘い始める。・・・というかこの不法侵入者いつ家に帰るんだろう。

手元が夕焼けの朱色の光りに照らされ、顔をあげてみるといつの間にか、縁側に座っていた不法侵入者は何処かに消えていた。

開けっ放しにされている障子から入り込んだ夏の風が髪を微かに揺らし、私はシャープペンシルを机に放り投げて畳の上で大の字になった。

あくびと一緒にイグサの香りを胸一杯に吸い込む。

イグサの香りには沈静効果があるらしい。障子の遠く向こうの夕焼け色に染められた森が、さわさわと梢を揺らす景色に尖っていた気持ちちが和んでしまった私は寝てしまおうと思った。

蝉達の不規則なお喋り。

久しぶりにゆっくり眠れるかも

自然とおりた目蓋の裏側に広がった暗黒の中に私は溶けていった。だが、ふいに意識が海の中から上へと浮上するように戻ってきた。

私がゆっくりと眼をあけると辺りは真っ暗で殆ど見えなかったけど、またいつの間にか居た金色の不法侵入者の居場所は、灰色いや、むしろ銀色の霧のような光にボンヤリと包まれていた。思わず渴いた

喉を小さく震わせ言葉を紡いだ。

「・・・本当に、天使なんだね」

「あア？今更何言つてんだよ」

「頭がいかれた不法侵入者かと思つてた」

「いかれてんのは人間の頭だろうが」

ぼんやりとした視界の中で不法侵入者は私を覗き込んで笑いを零した。昔読んだ絵本の天使もこんな表情をしていたような気がする。不法侵入者じゃなくて天使の翠色の瞳に酷く無表情な私を見つけた。

とりあえず、私が今言いたいことは一つだ。

「邪魔」

「・・・ふ、育ちがなつてねえな。人間」

「うつさい。あんた何様？ああ、何様俺様不法侵入天使様兼居候様だったね」

性格が著しく悪い天使はぴくりと顔を歪めた後に何を考えたのか、ちよつと笑つて私の顔のすぐ横に手をつき、あいつが持つてる唯一天使らしい端整な顔を近づけてきた。

頬に金色の綿飴のように柔軟な髪が滑っていく。

碧色の中に見える翠色が細められ凄艶な薄い笑みを湛えつつ、白くて長い指を頬に滑らせていき、ふいに温い吐息が耳を攪り、ぴくんと私の体が小さく跳ね背中になにかが這い上がるような感覚に拳を握った。

「気づいてやらなくて悪かったな。期待通りに思う存分可愛がってやるよ」

耳にふれた囁いた唇は、ひんやりとしていた。

ちなみに、この世は己自身のものであると同時に己以外のものである。己と己以外が融合して出来ている世なのであるから、予想外のことに陥るということは至極当たり前のことであろう。

まあつまりは異世界の天界とやらにいただろうこのピカピカな天使の考えが分からないということだ。

私はついに変態天使の奇想天外摩訶不思議理解不能な発想能力に対して閉口した。気づいてやれなくて悪かったなとは何だ。失敬な。私は普通に健全だ。本当に、この金色天使は馬鹿だ。馬鹿で俺様で破廉恥以外の何者でもない。

あれだ、もうこれはあれだ。色々ひっくるめて俺様天使と呼ぶことにする。とりあえず、私の天使に対するイメージを返せ。

「もう一回言うけど、邪魔。今すぐどかないと強制執行するから」

「ああ？聞こえね、ツツテえええエエえ！！」

「……だから言ったじゃない。強制執行するって」

私は冷めた眼で畳の上で大事な所を押さえつつ、のたうち回ってる俺様馬鹿天使を見下ろした。蹴り上げれないとか思ってたけど案外

やれるものである。

百獣の王ですら射殺せそうな鋭い眼で睨み付けてきたが翠色の両眼に涙を浮かばせながらの睨みなんて怖くない。俺様天使から視線をふいと外して電気のスイッチを探す為に壁に手を這わせた。

パチンとつけると暗闇に慣れた瞳が悲鳴をあげる。

・・・俺様天使かなんかの悲鳴も聞こえたけど。さらにどたんだん音がするけど。きゅっと眼を瞑ってからだんだんと光にならしていく。

私はうーんとのびをしてから脱いでおいた上着を羽織り視線を下におろしてみるとようやく俺様馬鹿天使はのたうち回るのをやめた。

「人間如きがア・・・ッ」

「はいはい。私お腹すいたから手伝ってくれない？水道の他に新しい色んなもの見られるけど」

「・・・・・・・・今すぐ連れて行け！」

俺様天使は今にも私に掴みかかろうとしていた手を引っ込め腕をわきわきさせつつ、破顔一生した。こんな単純で良いのか・・・？

思わず台所まで歩く中、足の裏に伝わるひんやりとした冷たさに笑ったのは自然の摂理であろう。台所の戸棚の中から1人暮らしのお友達、三分簡単クッキングのインスタントカップラーメンを取り出してフタをあけつつ俺様馬鹿天使 もう面倒だから俺様と呼ぶを呼ぶと、

俺様はひょつこりと後ろから私の手元を覗き込んできたが私は別段気にせずにポットのボタンを押した。

じゅぽぽー・・・

お湯が容器の中に注がれる音が静かに響いた。

「いやいやいや！なんでそんなもんから水が出てくんだよ?!」

「水じゃない。お湯」

「じゃあ何でそんなもんから湯が出てくんだよ。そもそも詠唱もしないとか一体どんな魔法だ！今朝見たのといい、ありえねえだろ！お前実は高位魔導師とかじゃねえよな?!」

「・・・いや、意味分らないから。これ電気で動いてるから。科学の進歩だから」

・・・アンタ頭大丈夫？

その言葉を言うのをグツと全力を注いで我慢して出来上がったライメンをズズズ、と啜って食べていたがその間俺様は瞳を輝かせポットを上下左右からくるくると観察していた。

カップの中身がからっぽになってから、そういえば。と口を開いた。

「夕飯欲しい?」

「聞くのが遅えな」

「・・・欲しいのですか」

「ふ、俺様は天使様だからな。人間が食うものなんざいらねえ。まあ、どうしてもって言うなら食ってやってもいいぜ!」

ああ、何かこいつ相手にするの、めんどくさい……。そう私は独りごちた。とりあえず腹が立ったのでスルーすることにする。鬼とか言っちな!

「はい、これタオル。シャワーの使い方教えるからこっち来て」

「シャワー?」

「あー・・・、水浴び・・・?」

水浴びだよな?と有耶無耶に返事をしてお風呂場突っ込んだら歓喜に満ちたような悲鳴が風呂場から聞こえたけれども、

・・・さて、さっさと布団でも敷いておこつと。

見ざる、言わざる、聞かざる、である。

晴れ晴れとお風呂からあがった俺様を取りあえず客間の布団に押し込んだ次の朝。

ぴびぴび。

鳴った時計を止めると眼を解すマッサージをしてから首を回した。大分肩がこってる。同じ姿勢でずっといたからかな。

適度に冷えた麦茶で喉を潤して縁側を私は見た。縁側は俺様の定位置だぜとでも言うように俺様天使は縁側でごろんと寝っ転がっている。

はは、その白い肌が紫外線にやられてしまえ。

朝から散々ひつついて、やることなすことに質問しつつもじいいと視線外さないし勉強を始めた途端に今度は惰眠ですか。

俺様天使の顔を覗き込んで見ると、あの綺麗な深い翠色の瞳を縁取る長くて艶やかな睫毛が風に揺れている。ふつくらとした唇は緩やかに閉じられていて、思わず白雪姫を思い出した。

・・・女として男に負けるって何かむかつくんですけど。

もう一度机に置いてある時計で時間を確認した後、私は玄関へと足を向ける為に俺様天使の横を通り過ぎようとした。

が、足を何かに掴まれてその場を通り過ぎることは叶わなかった。

パツと足下に視線を向けると白いしなやかな手が私の足を掴んでいた。白い手の持ち主は、にやにやと面白そうに眼を細め私を見上げている。

「どこに行くつもりだ？」

「・・・寝てたんじゃないの？」

「さあなア？で、行き先は？」

「・・・ご近所のおじいさんの所だけど」

「仕方ねえから俺様も行つてやるよ」

掴んでいた手を離し、俺様天使は身を起こし欠伸をもらしながら、んーと伸びをした。そんな様子を見ながら私は、はたと考えた。

この俺様天使は性格は天使というイメージを崩すような俺様で、破廉恥で変態である。だがしかし、ルックスだけは良い。本当にルックスだけは。正直ルックスと光輝くあのオーラだけが彼が天使であることを肯定しているくらいだ。

そんな彼をこのまま外に行かせても良いのだろうか？道ばたで人に会ったら騒がれないのだろうか。

じろじろと眺め回してみるが、じゃらじゃらとしたアクセサリーに絹のような光沢があるまるでローマ時代のように生地を羽織っただけのような異国の服。

明らかにある種の変人である。

「・・・ねえ、他の服ないの？」

「あア？なんか文句あんのか」

「一言でいうなら似合ってるけど、変」

「ヘッ、変だと？これだから人間は視野が狭いんだ。まア、仮に人間の言うようにこの服が変だとしても、俺様が着たらその服は全てにおいて至高の物となるがな」

「じゃあ腹巻き一丁も、かぼちゃパンツも、割烹着もあんたが着たら超似合っただぜってことね。分かったから早くその服を着替えてそんな奇天烈な服着てる奴とは隣を歩きたくない」

「じゃ、服を俺様に献上しろ」

私は思わずばかんと口を開いて振り返ると、偉そうにふんぞり返っている俺様天使が眼に入った。

「おじいちゃんのだけど、まあ良いよね。」

いそいそと服を包んでいた薄葉紙を畳んでいると、男物の浴衣を着た俺様天使は不思議そうに裾を引っ張ったり帯を突いてみたりした後、その場でくるりと回って見せた。

「流石俺様だな。どんなものでも着こなしてるぜ」

「・・・着付けてあげたのは私なのを忘れないで欲しいんだけど」

「こんなもん羽織って縛ってで終わりじゃねえか」

「・・・・・・・・」

ほとほと呆れた顔をしたあとに私は閉口した。何も言うまい。こういうタイプはシカトするのが一番である。薄葉紙を小さな戸棚の上に置き、片手について立ち上がった。

戸締まりをしに台所へと先ず足を運び裏口の鍵を閉めた。こんな田舎に空き巣なんて出るのかな。

そんなことを想いながら玄関へと辿りつくと俺様天使が壁にもたれかかって立っていた。

「遅え」

「うつさい、じゃあ手伝ってくれば良かったじゃん」

「ハッ！俺様を使おうってか？」

「・・・天使様はお優しい方だと思っていましたので何も言わずとも手をさしのべてくれるかと思っていました。私の一方的な勘違いでしたねアハハハ」

ひくひくと口の端を震わせて言うと、何を思ったのか俺様天使は手を出してきた。

意味が分からない。じと、とその手を見てから俺様天使に視線を向けるとどこか真面目な表情を浮かべていた俺様天使と眼があった。ヤツは自信満々な笑顔を浮かべる。

「ほら、手をさしのべてやったぞ」

「・・・一度そこの壁で頭ぶつけてみたらどう？」

「俺様にはそんな嗜好は無え」

くらりと倒れそうになった私は取り敢えず思考がどこかぶっ飛んで

いる俺様天使をスルーすることに決めた。サンダルを足に引っ掛けて靴箱の上の小さな藁籠の中からうさぎのキーホルダーがついている鍵をひっぱり出す。

「行かないの？ねえ、早くしてよ」

動く気配のない俺様天使に私は訝しみながらじろじろ眺め回し、足下に見た瞬間ああ、と合点がついた。

そういえばこちら辺に。

靴箱の奥から下駄を取り出すと、埃が舞い少しだけ咳き込んだ。下駄を足下に置いてあげると、俺様天使はきよとした顔で私を見下ろしてきた。

「大きさが合うか分からないけど、どうぞ」

「・・・あア」

俺様天使は、おずおずと下駄に足を滑り込ませた。まあ許容範囲かな、と私が頷いて見せると俺様天使が、ちよつと眼を見開いたような気がした。

森の中の小道を二人して歩く。おじいさんの家には私しか道を知らない為に俺様天使は大人しく隣を歩いている。

彼方此方と煌めく俺様天使のふわふわな髪に気づいた後、上を向い

て私は木々の間から零れ落ちる優しい光に瞳を細めた。ゆらゆらと、葉も小石も木も砂利も色を変えていき風が軽やかに駆け抜けて行く。バサリと音をたてて鳥が空へと羽ばたいて空へと消えていった。

「良い所だな」

ふと口を開いた俺様天使を見上げると、ほんわりと温かい光が翠色の瞳の奥に浮かんでいて思わず呼応するように私も小さく笑った。そして言葉を舌にのせるようにして音にする。

「国破れて山河あり、城春にして草木深し」

「何だそりゃ？」

「ずっと昔生きていた杜甫っていう人が書いたの。国が戦に敗れたけれど、山河はある。そして、春が訪れて崩れ落ちた城壁の中には草木が茂み始めている。って意味。自然は循環し続けるってことかなつまりは」

「へえ」

「今ある命を奪って血で染まった大地からまた新たな命が芽吹くんだよ。それって、凄いことだと思わない？」

争いにより森が焼かれ、空がくすみ、川が汚され、動物が殺され、大地が血に染まったとしてもその赤い大地からまた新たに小さな種が芽吹き、大樹へと成っていく。

そしてまた森は静かに形成され、空は澄んだ色を取り戻し、川は清らかに流れていき、動物が集まってくる。赤は緑に抱かれ、生命力に満ち溢れる。

「・・・あア、そうだな」

落ちてゐる幹を踏んだ為にバキリと足下で音がした。

「清秦おじいちゃん、こんにちわー！」
きよはた

朝顔の緑のカーテンのようになってゐる柵の間から顔を出して私は大声をあげた。清秦おじいちゃんは近所に住んでいるご高齢のお方である。

中から、庭におるよ。入っておいでーという声を聞き取り私はお邪魔しますと一言呟いてから裏庭へと足を進めた。

すると、縁側で日向ぼつこの真つ最中の清秦おじいちゃんを見つけた。茶色の湯飲みを手の中に収めながら、清秦おじいちゃんはニコニコと笑っている。

「清秦おじいちゃんこんにちわ」

「おお、こんにちわ。そろそろ来る頃かと思つておつたわ」

「今日も良いお天気だね」

「そうなの」

朗らかに笑う清秦おじいちゃんに私もほわわとした感じで笑顔を返すと眉を寄せた俺様天使が割り込んできた。

「なんだこのジジイ」

「なんだじゃないでしょうが！しかもジジイって呼ばないの！」

「あア？文句言ってるじゃねえぞ」

「こんのお馬鹿！」

どこか機嫌が悪そうな俺様天使を睨め付け、清秦おじいちゃんに申し訳なさそうに頭を下げると気にせんでええよ。と言ってくれた。

ぼんぽんと自分の隣を叩くので私は意図を察し、そこに腰をかける。と清秦おじいちゃんは俺様天使の方も見て、同じ動作をした。

俺様天使は、理解が出来ないというような顔をしたが私が腰をかける動作を見て、渋々とそこに座った。そして近くにおいてあったお盆の中の紙包みの中から様々な色彩の可愛い金平糖を手の中に落とそうとしてきたため、私は慌てて両手で金平糖を受け止めた。

ころりと可愛い金平糖が手の中で転がった。

俺様天使も私の手の中を覗き込んで、色鮮やかな金平糖に瞳をきらきらさせた。

「おいジジイ！これなんだ？」

「こら！清秦おじいちゃんでしょうが！！」

「んじゃア、清秦のジジイ！これなんだ！？」

分かっていない、と肩を落とすと清秦おじいちゃんは楽しそうに笑みを零していた。清秦おじいちゃんが良いなら別に気にしなくても良いのかな？そんなことを思っ私は注意しようとした口を閉ざし

た。

「ほれ、おぬしも手を出してくれぬかの？」

パツ、と出した俺様天使の手の中にも金平糖がゆつくりと落とされた。黄色の金平糖を一つ手に取り俺様天使は色々な角度から眺めたあと最後に空に翳してみると、きらりと光を受けて金平糖が煌めき、きよとした顔でこちらを覗き込んだ。

「・・・ちんけな宝石かなんか？」

その言葉に思わず手の中の金平糖を落としそうになり心臓がどきりとした。そうだった！こいつは非常識な俺様馬鹿天使だった！

ドキドキする胸を必死に抑えながら清秦おじいちゃんを横目で伺ったが、清秦おじいちゃんは相変わらずにこにこしてるだけで特別なんら戸惑いなどを見せてはいなかった。

「金平糖を知らんなんだか。ほれほれ、見ておれよ」

そう言つて清秦おじいちゃんは私の手の中から白色の金平糖をつまみあげ、自分の口の中に放り込んだ。

俺様天使を見上げてみると、愕然とした表情で清秦おじいちゃんを見ていた。ゆるゆると視線をさげ俺様天使の手元を見ると、手の隙間から金平糖が2、3個零れ落ちていつている。

「人間つてもんは宝石を食うのか！？」

身を乗り出して、くっつかかる俺様天使に清秦おじいちゃんはから

からと笑い、ほれおぬしも食べてみたらどうかの？と食べるのを勧めていた。

俺様天使は、掌の中にある金平糖を親の仇でもいうように長い間睨み続けたかと思うとちらりと私を見てくる。

「うん、食べたなら？美味しいよ」

そう言ってピンク色の金平糖を口の中に放り込むと程良い甘さがふわりと舌の上で広がって思わず頬を緩めた。ころころと口の中で転がし溶けていった頃に意を決したのだろうか、俺様天使も金平糖を一つつまみ上げ匂いを確かめ、口の中に戦々恐々と放り込んだ。

「・・・・・・・・・・甘い」

「そりゃそうじゃ」

砂糖菓子じゃからな、と茶目っ気たっぷりでウィンクを受けたにも関わらずヤツは黙々と手の中の金平糖を平らげていき、もごもごと口が動いている。

「清秦のジジイ、俺様はこの金平糖とやらを気に入った！」

「そうかそうか」

そんな会話に耳を傾けながら自分の金平糖を私は食べていたら、すっと横から手が伸びてきて私の残っていた金平糖を掻っ攫って行った。なにしやがるんだ。食べ物への恨みは恐ろしいと知らないのか。

むっとして睨み付けたが「貢ぎ物だ」とのたまるどこぞの天使とは違って優しいからその暴虐な振る舞いを許してやることにした。

三人でどうでも良い日常的な話を続けていると奥の部屋の方から何か坪を打つようなゴーンゴーンという重い音がした。

「おやまあ、もうこんな時間に」

「何の音？」

「時計の音じゃよ。5時になると鳴るようになっておる」

「夏だからかな、5時なのにまだこんなに明るい。・・・お暇するよ」

未だ赤に、夕焼け色に染まらない青い空を見上げた。大きな入道雲が風に吹かれてゆっくりと空をさすっていく。

私の言葉によつこらせ、と清秦おじいちゃんは立ち上がり奥に入っていたと思つたら顔をひよっこり出して俺様天使をちよいちよいと手で呼び寄せた。金平糖で餌付けられた俺様天使は面倒臭えと言いながらも素直に下駄を脱ぎ奥に入っていた。

私は足をぶらぶらさせながら二人が帰ってくるのを待った。

「これ一体なんだよ？卵か？」

「今夜になれば分かるじやろうて」

「はア？ワケ分かねえ」

声がする方を振り返ると、緑色に黒いすじが入っている丸いものを俺様天使が両手で抱えていた。

「スイカ？」

「偶々知り合いから貰ったからの、お裾分けじゃ」

「えーいやいいよー！」

顔の前で手を左右に振ると清秦おじいちゃんは困ったように笑って皺の寄った手で私の頭をよしよしと撫でた。温かさを感じて思わず私は眼を細め俯いた。

「実は、2個貰ってて困ってたんじゃ。一人じゃ食い切れんしの」

自分の為に貰っておくれと言った清秦おじいちゃんに私は、ぎこちないながらも頭を下げ感謝の意を告げた。俺様天使が脱ぎ捨てた下駄に足を通し庭へ降りてきた。

「んじゃアな、清秦のジジイ」

「ちよつと先行かないでよ！清秦おじいちゃん、スイカありがとう！次、何か持ってくるからね！」

慌ただしく飛び出して行く姿を見て清秦は、口元に柔らかな笑みを浮かべ、祈るかのように両手を合わせ瞳を閉じた。

「いつでも来なさい、ぜひ尊いお方も一緒に」

寄り道もせず古屋に帰った時には陽が沈みかけて世界を夕陽色に染めていた。

私は俺様天使にスイカを持っているように言付けた後、縁側を通り、古い倉庫の前で足を止めた。

建付が悪くなっているのか、扉が中々スムーズに開かない。両手を使ってようやく開けると、ぎしりと扉が叫んだ。

薄暗い中を夕陽の光を頼りに目当ての物を探して視線を彷徨させたが中々これが見つからない。仕方無く諦め種を返すと、俺様天使がスイカを手に縁側から顔を出していた。

「・・・スイカ置いたら？」

「人間が持つてろって言っただろうが」

いや、確かにそうは言ったけど、そういう意味じゃないんだけど。スイカを我が子のように大事そうに抱いている俺様天使に私が眉に皺を寄せてると、俺様天使は倉庫に近づいて来た。

「何やってんだ？」

「ちよっと捜し物。でも暗くて見つからなかったの」

「へえ。んじゃアほらよ」

俺様天使はスイカを片手に持ち直し、人差し指で宙にクルリと円を描くと、段々と白い靄が渦を巻くように指近くに纏わり始めた。きよんととして呆けた顔をしつつも凝視したその指がパチンと一度弾かれたと思ったら優しい光が倉庫の中を照らした。

私が思わず、へ？と間の抜けた声を出すと俺様天使がクク、と喉で笑った。

その笑いにムツとして見上げると俺様天使が私の額目掛けてチヨツプを喰らわしてきた。

「ブツサイクな顔だな」

「うつさい！アンタが異常なだけでしょ！」

「僻みか？」

「・・・・・・・・で？何この光」

意図的にスルーしたのに気がつかないのか俺様天使はそのまま素直に言葉を紡いだ。

「精霊だ」

「・・・・は？」

「ああ？だから精霊だって言ってるだろうが」

「ごめん、なに？」

「ふざけてんじゃねえぞ人間」

「だって精霊って！精霊って何！なんでそんなにもファンタジーなわけ！」

「ハッ、これだから人間はいけねえな。眼に見えるものが全てじゃねえんだ。人間は自分が見えてねえからって他人のそれまでも否定すんのか？まったく人間はバカまるだしだな」

「バカはアンタでしょうが！というか天使だとか精霊だとかもう本当に、なんでそんな・・・ああもう良い、うん、良いよ」

私は取り敢えずもう考えるのを放置して無理矢理自分を納得させることにした。

だって本当に光ってるんだから！！眼に見えないものは信じない、それが人間だけど眼に見えちゃったんだもん。流石に非科学的でも認めざるを得ないでしょうが。

精霊だかなんかの光を借りて、私は捜し物を見つけた。

上から覗き込んでも分かるくらい埃が被っているが意を決してその捜し物、木製のタライを引っ張り出した。よっこらせと地に置き倉庫を出てから両手を見てみると埃で灰色になっていた。

「ありがと、見つかった」

「ん。お前らもご苦労」

俺様天使が光に向かってそう告げると、優しい光が霧散して消えていった。思わず凄いと呟いたが、頭を振りタライへと意識を戻した。

さて、これ洗わなきゃ・・・。

「ね、あそこにある水色の棒みたいなの見える？」

「あれか？」

「そ、それを持って前に見せた蛇口ひねってごらん？」

スイカは私に渡してね。と言ってスイカを受け取ると俺様天使は水色の、つまりホースを手に取り、中央に開いている穴を不思議そうに覗き込みながら蛇口をひねった。

ホースと蛇口。普通の人だったら蛇口をひねった時にホースを覗き込むなんてそんな非常識なことはいらないだろう。けれど、コレは非常識の塊である。予想通りの展開になってしまえ。

「ぶっへえ！」

「ぶっ、こ、こ、れがみ、水も滴る、ひっ、良いおと、こってやつ！？」

変な声をあげて飛び上がった俺様天使の様子を見て私は必死に笑いを堪えるようにスイカを持った手で腹を押さえた。予想的中である。いいはまだ。俺様天使はホースから噴水のように溢れ出る水を呆然と眺めている。

ボタボタと髪から大量に滴り落ちる水が俺様天使の端正な肌を伝っていた。

「びびった・・・」

呆然とした顔でぽつりと呟いた俺様天使の一言がその一言を現実にも物語っているように若干声音が高めだったのに気がつきとうとう我慢しきれずに大爆笑を開始した。

「笑っんじゃねえ人間！」

白陶器のような肌を若干朱に染め、きゃんきゃんと吠える俺様天使に腹がまたよじれそうになったが腹に力を入れて幾度か死にそうな感じで深呼吸をしたら笑いによるひくつきがとまった。

スイカを下にそっと置く代わりにタライを手に取り俺様天使の元へ行った。

「はい、タライに水かけて。」

不機嫌さを表すように雑にタライに水をかけ、私が拭くという作業を何回かした後、綺麗になったタライに水を張り、スイカを中にと沈めた。

スイカの重さに水がその分だけ溢れ出て、渴いた土が湿り気を帯びた。

「何やってんだ？」

「こつやつて冷やしておくの。風流でしょ？」

びしょぬれのくせに興味津々にタライを覗き込む俺様天使を目に入れてからお祭りとかに連れてつたら面白いんだろうなコイツ。だなんて思いながらサンダルを脱いで縁側へと上がった。

ぺちゃんこになった髪の毛から滴る雫が頬を滑って鬱陶しそうに左目をこすった俺様天使を一度振り返ってから急ぎ気味に早足で廊下を蹴り、風呂場の木製の引き戸をがらりと開けてから棚へと手を伸ばし一番上に仕舞っておいた柳行李の中の物を一つ拝借して縁側へと戻った。

タライの中のスイカを軽く叩いていた俺様天使に私はわざわざ持ってきたタオルをぶん投げようとしたが、途中で落下するのは目に見えていたから手招きをして近づいてきた俺様天使に嫌がらせの如く覆い被せた。

「ほら、これで拭いて」

「ぶふえ」だか「おふえ」だか良くわからない声にニンマリと隠れて笑った。ちなみにさつきから嫌がらせをしまくっているのは別に金平糖をとられたという食べ物の恨みではない、決してない、断じてない。さて夜ご飯作らなきゃつと。

「タオルで拭いてから上がってね」

「あー・・・、あア」

踵を返し背を向けていたが、口籠もった俺様天使に気がついて振り向いたけれども何でもないと言を振られたから気にせず足に足を廊へと向けた。

「精霊使えばこんなもんスグ乾くのにな」

さっきの落ちなかった言葉が誰も居なくなつた庭先でするりと零れ落ち、一人の不遜な天使はふかふかのタオルにぽふんと顔をうずめ、ふわりと香る優しい匂いに力を抜き息を一つ吐いた。

その頃私は、ガスの元栓をきゅ、と閉めて流し台に置いておいたザルの中に鍋の中身、白い糸のような素麵そうめんを流し込んだ。それを冷水で冷やしてから、平皿へと盛りキュウリ等の野菜を小さく添えた。

手を拭いてから、お盆を持ち上げ居間へと歩を進めると、縁側へと繋がる廊下の角からぼんやりと光が行き場を探しているように漂い、見え隠れしていた。

縁側で食べるつもりはないんだけどなあ。お盆の上にのせられている二対の赤茶色の碗とお箸に視線を落とした後ふうと息をつき、居間へと向けていた足をその光のもとへと方向転換した。

角からヒョッコリと顔を覗かせると、足音に気がついていただろう俺様天使が、静かにこちらを見上げていた。

「ご飯できたよ」

ふいに翠色が瞳の中で揺らめいたけど、それも私が瞬きを一度するとすぐに消え失せた。気のせいだったのかな？私の頭一個分よりも背の高い俺様天使を見上げると、お盆の上のそうめんを見下ろしてヤツはニヤリと笑った。

この笑いは絶対バカにしている顔である。そうめんの何が悪い。お手頃なんだぞ、作るのも値段も。

暗い中、斜め前を歩く俺様天使に私は沈黙を破るように口を開いた。

「そついえば四六時中光ってるけど、それもまさか精霊だとか言わないよね？」

「仕方無えだろ。払っても払っても俺様から離れたがらねえんだからな。……つか人間のくせによく分かったな」

「うっさいわ。そっちの世界じゃみんなそんなに光ってんの？」

「あー・・・、外界の連中のごく少数だけだなア」

「へー」

「ま、俺様を上回るくらいのヤツはそうそう居ないけどな」

私の前に胡座をかいて座っている俺様天使がお箸を片手にフツと偉そうに笑ったのを視線に捉え、口を引きつらせつつもお箸に手を付けた。

対して会話も無い中で夕飯を食べ終わり、食器を片付けた後に居間で偉そうに踏ん返り返ってるだろう役に立たない俺様天使をそれなりに大声を出して縁側から呼んだ。

サンダルを足にひっかけて庭へ下り、しゃがみ込んで、のぞき込むと水面が家の中から漏れる光を反射しながら、風に撫でられゆらりと揺れた。

そつと右手の掌をはわせてみると、ひんやりとした冷たさとするんとした触り心地が神経を通して脳へと伝わった。

ふつと何故か頬が緩んでポンポンと意味もなくスイカを叩いてみる。

「人間、わざわざ来てやったぞ」

スイカを叩く手を止め、半ばふくれっ面で振り返ると縁側に片膝をたてながら座り込んだ俺様天使が居た。

果てしなく偉そうなこの物言いはどうにかならないのだろうか。

だがこんなことを正面切ってこの俺様天使に言っても無意味なのは眼に見えて明らかである。出会ってから対して時間も経過していないが俺様天使の性格をだいぶ把握してきたような気がする。

・・・あまり嬉しくない。

ふう、と息を吐いてから膝に力を入れて立ち上がった。

ざり、と砂を踏む音を捉えながら縁側へと進むと、片膝の上に顎を乗せこちらを見ていた俺様天使は何事かと頭を擡もたげた。

ふわふわとしたゆるい髪が宙を舞う。

「ちょっと待ってて」

一言、言付けてから台所へと向かい、まな板と包丁、サランラップ、タオルを大きめの盆に乗せて縁側の方へ戻る最中に、ふいに古い木製の扉を視界に捉えて私は足を止めた。

扉の下は煤や埃で汚れており、うっすらと取っ手の部分が灰色に染

まっていた。

思わず鼻で過剰な抗原抗体反応が起こりそうにる。まあ、つまりはアレルギーと言われるものなのだが。そういえば、あの中にあれ残ってたような気がするなあ・・・。

頭を過ぎった物に興味を注がれたが、手に持つお盆の重さにハツとして切り替えをするように頭を振り縁側へと戻って行くことした。

「お待たせ」

「確かに待たされたが、俺様は寛容だから特別に許してやる」

はいはい、どうもありがとー、と棒読みで感謝の意を告げ、お盆を置くと俺様天使は訝しげに見下ろしたが私は気にせずによいしょ、とタライの中からスイカを持ち上げてタオルの上に準備しておいたまな板へとそつと乗せた。

俺様天使はパチクリと眼を瞬かせ、呆然とした顔をしていたが、私が包丁を手を取った瞬間に包丁を瞬時に私の手から奪い取り騒ぎ始めた。

ゆらりと俺様天使が纏っていた光の靄の色が銀から紅へと変化した。

「に、人間！何しようとしたんだ今！！」

「はあ？何ってスイカを切るに決まってるでしょ。それ以外に何があるっていうの？」

「んな！やつぱり人間は俺様の前でそれを切ろうとしてたのか！？」

「切る以外にどうやってスイカを食べるって言うのアンタは！？まさかスイカ割りみたいに割れてか！？」

「違い！俺様の前でソレの命を奪うなっつってんだ！！」

包丁を後ろ手で隠しながらそう喚いた俺様天使に私は、勢威を削が

れてしまいきよとした顔を思わずした。脳内で、先ほどの台詞を反芻してみる。

ソレの命を奪うなっつってんだ！！

・・・いや、え？ちょっと待て。ソレの命を奪うなって言っ
たよね？え、え？あれ、え？これスイカだよ？いや確かに命はある
っちゃあるんだけど。。。もしかしてスイカって知らない・・・
？いやでもそんなまさか。

内心ドキドキする胸を押さえながら、手を下ろして声に出してみよ
うと決めてみた。

「あのさ、スイカって果物だよ・・・？」

いや、スイカって果物じゃなくて野菜だったっけ？そうそう、古代
のエジプトの人もスイカ食べてたらしいんだってね。ま、実を食べ
るんじゃなくて種を食べてみたいけど・・・。

「あア？」

あからさまに眉をぴくんとはねさせた俺様天使に再度私は同じ言葉
をかけ直してみることにした。

「だからスイカって果物なの」

「・・・・・・卵じゃねえのか？」

「違うよ。もしそうだったら一体何の卵なわけ」

「・・・・・・」

俺様天使はまな板の上のスイカに包丁を持っていない方の手をのばし、そつと触れてから、翠色の瞳を静かに閉じた。

触れている方の手に視線を落とすと、ふいに俺様天使の手から紅色の光の靄が晴れていくように、銀色の靄に侵蝕されていった。

翠色の瞳が私の濡鴉色の瞳に映ると、すぐに反らされ俺様天使はプイッとそつばを向きながら包丁を差し出してきた。私は白い眼でその包丁を見下ろし溜息をつく。

「いや、確かに包丁は返して欲しいけどさ、刃の方を向けて渡さないでくれる？」

柄の方を俺様天使が持っていた為に嫌が応でも刃先がこちらに向けられている。刺したいのかこのヤロー。

私が、心底呆れた感じでそう呟くと俺様天使はギロリと睨んできた。だがしかし、何故私が睨まれなくてはならないのだろうか。

仕方無く刃先を指を傷つけないように持ち、包丁を受け取った。

何等分にか切ったスイカを二人縁側に腰掛けながら赤く熟れ、溢れ出る甘い果汁を零さないようにして二人して静かにぱくつく。

黒い種をゴミ箱に入れ、そつと横を見てみると俺様天使は黒い種まで飲み込んでいるようで、思わずぎょつとして俺様天使の膝を数回叩いた。

「ちょ！種は食べなくて良いんだよ？」

「食えんだろ？」

「た、食べられることは確かにそうだけどさ！」

「んなら構うんじゃないやねえよ。どうせ食ったって俺様は消化しねえんだからな」

「消化しないってつまり、食べても食べなくても良いってこと？」

「あア。栄養なんてもんは俺様には必要ねえからな」

「へえ」

そこで私は一度会話を止めて、スイカに齧り付いた。

食べなくても良い、とは一体どんな気持ちなんだろう。食欲というのは睡眠と同じで動物が生まれ持っている本能。動物は本能に従い、食べる為に生きるのではなく、生きる為に食べる。

他の命を奪って、ただ生きる為に

「そういえば、さつきスイカを卵だと思ってた時に、殺すなみたいなこと言ってたね」

小首を無意識に傾けると、俺様天使が小さく舌打ちを響かせた。忌々しそうに眼を細め、睨み付けた方へ私も視線を向けてみると、澄んだ森を照らすように落ちてきそうな星空が視界一杯に広がった。

ふと甦る柔らかな声。

そういえば小さい頃、死んだら星になるってよく言われたよね

（穏やかに紡がれたその先の言葉を思い出したくは、ない）

・・・じゃあもし僕がさ

思い出したくは、ないんだよ。

握る手に力がこめられる。光り輝く星空を淡々と眺めていたら、ふ

いに俺様天使がこちらを見ていることに気がつき視線をずらすと、俺様天使は何とも言い難い表情を浮かべていた。

「・・・人間は、星空が嫌いなのか？」

一瞬、喉に何かが詰まったような感覚に襲われた。

だけど私は俺様天使の問いを笑って流そうと、口角をつり上げたが無意識に顔を隠すようにして俯き、瞳から全ての景色を隔絶した。昔の情景が瞼の裏に否応なしに映し出されるのに気がついていながら。

さらりと、髪が肩を滑っていく音がした。

夜空はあの頃と全く変わらないようにみえるのにやっぱり変わってしまったもの。

遠くへ遠くへ、消えてしまったものは一体どこへ行ってしまったんだろう。

俺様天使は、髪で見えなくなった表情を伺うように黙って見ていたが、ふと、隣に腰掛ける者の掌の白さに気がついた。強く握りしめ

られた掌に更に力が込められ、ふいに、ふるりと黒い睫毛が揺れた。

「・・・・・・・・、嫌い」

「星なんて、大嫌いよ」

だって、だって

死んだら、星になって君を照らして、見守っててあげるよ

星が光輝いているのは、自分の命を削ってるからなんでしょう？

私は、二度も、死を迎えさせているみたいで

それは朝、冷蔵庫を開けた時から運命付けられていたのだ。

「材料がない・・・」

昼下がり、私は山から下りて街へと向かった。
そう、なぜか

「おい人間！あのでっけえ動いてる固まり何だよ！？しかも赤青黄
のあのランプは一体どういう意味があんだ！？つか、アレは何だ
アレ！」

なぜか、言動が田舎者と同じである俺様天使と共に。

ああー、と両目を思わず一瞬手で覆い隠して現実逃避を図ったが俺様天使の急かすような声に現実を見つめることを嫌々ながら決定した。

「あれは車。人を乗せて運ぶの。ちなみにぶつかったら基本死ぬから。それであのランプは信号。車や人を規制するもの。青の時だけ渡って良しのサインだから。それで、アレは」

そんな問答を繰り返し続けた私はスーパー近くに辿りつく頃にはよろよになつていた。いつまで喋りらせるつもりだこの俺様は！！

少し前をきよろきよろしながら歩いている俺様天使の背中を半ば半眼で睨み付けたが当の本人は気がつく様子もない。

眼からビームはなぜ出ない。

そんなあほらしいことまで考えてしまつて、自分の疲労は相当なものだと実感し、スーパーに着く前にどこかで休もうと周りを見回してみると、ちょうど可愛らしいカフェを見つけた。

「ねえ」

「あれなんであんなに早く走るんだよ。一体何の乗り物だ？」

「バイク。車と自転車を混ぜた感じのもの。それよりもさ」

「あのガキが持つてる透明の入れ物はなんだ？」

「ペットボトル。硝子を柔らかくしたような入れ物。というか聞いてる？」

「だあああ！うつせえなああのバイクつつうやつは！！何で何体も一緒に音たてながら走っていつてんだ！！」

「・・・・・・・・ちよつと」

「お、おい人間！女が箱入ってるぞ！？」

「・・・・・・・・テレビ。箱に入ってるわけじゃない。というか聞けつての、この性格破滅者」

「箱に入ってないつつうことは・・・映しの鏡みたいなものか。じゃあアレはなんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だからアレだつつてんだろ人間」

ひくりと口角を引き攣らせ黙りを決めた私に俺様天使はイライラしながらも振り返らずに聞いてくる。

肩にかけたバックでその頭殴ってやろうか？

バックを手に持ち直し、スイングするように後ろにふり下げたところでようやく馬鹿空気読めない変態巫山戯るな俺様天使が振り返った。

「さっさと答える聞いてんのか人間」

思わず振りかぶったバックで俺様を軽く吹っ飛ばしたのは悪くないだろう。何が聞いてんのか人間だ。聞いてないのはアンタの方だろうが。

バックをぶつけられた俺様天使はぶつかった頭を手で押さえながらギリギリと歯ぎしりする勢いで私を睨み付けてきた。

「何すんだ人間ごときが！！」

「私の話を聞かなかったアンタが悪いんでしょうが！！というか誰がここまで連れてきてあげたと思ってるわけ！？」

「あア？誰がここまで付いてきてやってやがると思ってんだ」

自分こそ正しい、自分が一番偉いともいうようにふんぞり返ってそう声に出したヤツの頭禿げろ！禿げまるだしになれこん畜生！！！！

むしとりそうになる手を逆の手で押さえ激情をのみこんだ。取りあえず今は休みたいので私は俺様天使にこっち来て、と行ってカフエに無理矢理押し込んだ。

扉に鈴か何かが付いていたようで、扉を潜りぬけるとチリンと可愛い音が響いた。

ウェイトレスの女の人が駆け寄ってくる。ウェイトレスのお決まり文句の「何名様ですか」に答える為に脳内で「二人です」という言葉を瞬時に作ったが中々お決まり文句が降ってこない。

不思議に思った私が置いてあったメニューから視線を外しウェイトレスの方を見てみると視線が全く動いていなかった。

その視線を追ってみると、金髪のふわふわな髪にたどり着く。

俺様天使の後ろに立っていた私は、ああ、と気がついた。ここから見れば、髪に辿り着くが、前から見れば顔につく。

確かに変態だろうと馬鹿だろうと破廉恥だろうと人の話聞かない性格破滅者だろうと無知であろうと俺様であろうと

こいつ、顔だけは良い。

白い肌にスツと通った鼻。宝石を詰めこんだような翠色瞳を縁取るような長い睫毛。艶やかな唇は微笑みを絶えず浮かべているようにみえ、甘い綿菓子のようなふわふわな金の髪が光に反射するように

煌めいているのだ。

しかも今日は清秦おじいちゃんのお孫さんの服を借りている。さらに言うなれば、お孫さんのセンスは抜群である。

されど、とウエイトレスに哀れみの表情を浮かべた。顔が良いだけではダメなんだよウエイトレス。こいつ、顔は良くても性格最悪だから。

「あの、すみません？」

「・・・あ！も、申し訳ありません。何名様ですか？」

二名です。そう答えるとウエイトレスは少しわたわたした様子でテーブル席へと連れていってくれた。

オーダーは後でお願いしますと答えると、少し残念そうな顔をした後に俺様天使の方を名残惜しそうに見ながら去っていった。

どこかほっとして椅子にもたれかかりながらメニューを開くと俺様天使の視線を感じて顔を上げてみるとニヤニヤ顔のヤツが居た。この顔はどうせしようもないことを言うに違いない。

「あの女、俺様に見惚れてやがったな」

「・・・」

ほらね。とりあえずうん、と短く返し、コップの中の水に口をつけた。

氷によって冷やされた水が喉を通り、身体を潤うイメージがふと脳裏に浮かんた。私の身体は今まで砂漠だったのだろう。浸み渡る。

「あ、このトマトスパゲッティとプリンカフェーつつお願いします」

「かしこまりました。プリンカフェーの方はいつお持ち致しましょうか？」

「食後をお願いします。」

注文を終え出されたスパゲッティを口に運んで咀嚼すると、眉間に皺を寄せた俺様天使がコップに口をつけていた。そして、手元でコップをぶらぶらと手持ち無沙汰に揺らしてからはたから見れば綺麗で鮮やかな、私から見れば腹立つ笑顔を浮かべた。

そこで頬を染めてる見知らぬ女性、騙されるな。

「呑気になに一人で食ってんだよ」

「だって食べても食わなくても同じなんですよ？それなのに態々頼

むのはお金がもつたないじゃん」

ぴしゃりとそう言うと、俺様天使はそういえば、と自分が言った言葉を思い出し、まア、確かにと呟いた為に、私はこの話しはこれで終わりかと思っていたが、それはどうやら甘い考えだったようだ。

「だけど、人間は天使に貢ぎ物を捧げるべきだろう？」

「べきじゃないです」

聞く耳を持たないようにそうさりと流したが俺様天使はそれでも口を尖らせて、寄越せ寄越せと馬鹿の一つ覚えのように連呼してくる。

（そろそろ周りの客の視線が辛くなってきた・・・）

フォークをかちやりと置き、口元をナプキンで拭いてから「すみません」とウェイトレスを呼んでもう一つの注文の品を先に持ってきたもらうように頼むと、ウェイトレスは是の意を示し下がっていた。

未だに俺様天使の視線は私のスパゲッティへと注がれている。他人が食べているものの方が美味しそう見えるという心理は確かに私も体験したことがあるから理解できるけど。

ふう、と溜息を一つ吐いてから、俺様天使注目筆頭株ならぬ筆頭皿をヤツの前まで押し出すと、ガバッと顔をあげて私を見た。

翠色の瞳が何かを期待するかのようにきらりと煌めいて見える。

待て、をされている犬なのかこいつは・・・。

肘をつきながら俺様天使を観察していると、フォークで巻き取ったスパゲッティを怖ず怖ずと口の中に運んでいく。

あーああ、何て満足そうな顔をしているんだろうか。

ふっと思わず口を緩めると、プリンカフェが運ばれてきた。

肌色のぷるんとしたボディに茶色のカaramelソースがふんだんにかけられていて、とろりとボディを滑って行った。ウエハースが二つチョコクリームにささっている。

チョコレートとバニラのクリームのコントラストを彩るように透明な容器からコンフレークが見え隠れしていた。

ウエハースを一つつまみ上げ、クリームを付けて食べると、サクッとした食感と甘く冷たい感覚が口の中に広がった。

甘い幸せに、ふふふと頬に手を当てると俺様天使が残っていたスパ

ゲッティーを食べ終え、何か怪しいものを見るかのように私を半眼で眺めていた。

「食べ終わったの？」

「あア・・・」

「ふーん、じゃあこれ食べなよ」

手に持っていた残りのウエハースを気にながらもカフェを俺様天使の方へと先ほどと同じように渡すと、きょとんと間抜けな顔をした。

「もともとこれアンタにあげるつもりだったし」

食べて良いよ。と続けざまに告げる。

一瞬眉を潜ませた俺様天使は、素直にこくりと小さく頷いた。

「ほら、そこにスプーンがある・・・って」

軽くひっぱられ、顔を思わずあげると、ふいに視界いっぱい金色のふわふわとした髪が広がった。ウエハースを持っていた冷たい指先を熱いものが静かに這ってくる。

反射的に腕を引っ張って身を後ろへ下げようとしても右手が強く掴まれていて動かすことが出来ない。

真っ白になった頭が、掴まれた右手の熱さを伝えてくる。

息を浅く吸い込んだ所で、熱いものが名残惜しいかのようにぺろりと指先を舐めていった。

自分の指先を呆然と眺めてから、離れていく俺様天使に視線を向けると先ほどまで自分の指先を這っていったであろう赤い舌が、ぺろりと扇情的に唇を舐めとり蠢いた。

俺様天使は呆然としつつも真っ赤になった私に気がつき白く長い指で口元をすつと拭いとり、満足そうに眼を細め言葉を紡いだ。

「甘いな」

「・・・・・・・・！！！」

その一瞬に、ぐわアアあと怒りやら恥ずかしさやら色んな気持ちからさらに頬が熱くなってくるのに気がついた私は凄いい勢いで顔を下へと逸らした。

（一体何なんだこの変態天使は！！！！）

スーパーに辿り着いた頃には、もうへとへとになった私。

子どもの「何で？どうして？」攻撃に耐える大人はこんな苦勞をしているのか。

まあ、変態セクハラ破廉恥俺様天使は、純粹無垢な子どもではないが無知な所はまったくもって同じだ。

じろりと俺様天使を見ると、視線に気がついた俺様天使は私の視線に気がつき、形の良い唇が面白そうに半円を描いた。

弧を描いた唇を捉えると、先ほどその唇に指を触れられたことを思い出して、かあああ、と頬が熱くなってしまう隠すように俯きスーパーまでの道を歩いた。

自動ドアをくぐり抜けると、ひんやりとした冷たい空気が火照った身体から熱を奪うようにまとわりつく。夏に冷房は神である。

スーパーの赤色の買い物カゴを手に取り、俺様天使を見てみると、買い物カゴの隣に置いてあるカートに興味津々に眺め回しており私は咄嗟に買い物カゴを握る手に力を込めて備えた。

ああ、くる、くるぞ！例のあれが！！

「人間！これ何だ！？」

「・・・ベビーカーみたいなもの。子ども乗せて物を運ぶ感じなやつ」

ほらきた、例の「これ何だ」攻撃。

面倒くさそうに答えたが、律儀に教えてあげた私は偉いと思う。その返答にきらきらと瞳を輝かせていた俺様天使はあっさりと輝きを失わせた上に、つまらなさそうに言いやがった。

「ああ、ガキを運ぶアレか。」

この野郎、百科事典でも頭にぶつけてやろうか。しかもなぜ自動ドアに吃驚しなかったのだ。

ぐらりと、頭を擡げた感情を理性で制し、足を進めると野菜売り場が一番最初のコーナーとなっていた。

夏の野菜である赤く熟れたトマトを筆頭にキャベツや胡瓜などを手に取って眺めたあと、手早く買い物カゴに入れる。

私の横で、従業員が申し訳ないように段ボールに詰められた野菜を次々に山に盛っていった。

・・・そういえば、「これ何だ」攻撃がいつの間にか止んでいる。
絶対くると思っていたんだけど。

そう思つて顔をあげて左右を見てみるが俺様天使の姿が見えない。
幾ばくの驚きのあと、はっと気がついた。

この状況は、すなわち迷子の条件にあてはまる。

・・・ちよつと待て。え、なに、ちよ、はあ？どこに行つた
わけ！あいつ本当に子どもな訳！？迷子！？迷子だよこれって！
！眼を離れたスキに迷子つて何！！！！

ちなみに、このスーパーは三階建ての一階の奥にある。

私は、買い物カゴの中の艶々とした野菜達を呆然と見下ろしながら
思考をフル回転させていたが、ふつと口角をつり上げ手近にあった
モヤシを買い物カゴの中に放りこんだ。

ちなみに、私が辿り着いた答えは俺様天使がいない方が静かに、そ
して平和な買い物ができる、だった。買い物を終えた後に迷子セン
ターにでも行つて呼び出せば良い。

迷子なんだねお兄ちゃんって小さい子どもに指をさされて笑われる

が良^いさ。恥^はを知^らなさい。

レジでお金を払^いってから、二つの買^い物袋をぶら下げ私は二階にある迷子センターと書かれたコーナーの手前で葛藤^{こつとん}していた。

さっきは確かに、呼び出されて恥^はずかしがれと思^{おも}ったのだが、これ何気^{なんげ}に呼び出す方も恥^はずかしいのだ。

従業員の不思議がる視線^{しせん}が痛い。

諦^{あきら}めたように私はいそいそと背を向けて、スーパーの入り口へと移動^{いどう}することにした。入り口のベンチで待^{まち}っていた方が賢明^{けんめい}なような

気がしたからだ。

二階から一階に下りるため、エスカレーターで下っていると、エスカレーター横のベンチに、ふわふわとした金髪を見つけた。

ヤツだ！

また迷子になられたら困ると私は、エスカレーターを駆け下りてふわふわの金髪を罵りたくなったが、俺様天使が買い物を、こちらが驚くくらい睨み付けていたのに気がつき口をつぐんだ。

そして私の存在に気がつき、俺様天使は瞠目した。

その瞳には、先ほどの鋭い光が嘘のように霧散し心の底から安堵したような柔らかい光が灯っている。その雰囲気と言いしれぬ何かを私は感じてどうすれば良いのか分からなくなって木偶の坊のように呆然としてしまった。

「・・・人間、帰るぞ」

いつもは自信に満ちあふれたその声が、掠れるような音を出す。伏せられた長い睫毛が、堪えるように震えているのに気がついた。

・・・ああ、そうか

私は思わず買い物袋を左手に纏めて持ち、右手で俺様天使の左手を握って、身を竦ませつつ恐る恐ると顔をあげた俺様天使に安心させるように微笑んでみせた。

「こうしてれば、もう大丈夫」

繋がれた掌の暖かさとともに脳裏に、優しく笑う彼が一瞬だけ過ぎった。

「帰ろう。帰って、清秦おじいちゃんに貰ったスイカ、一緒に食べようっ。」

（・・・ふっ、仕方無えから人間に俺様の手を握らせてやる！）

（あー、はいはい。殴って良い？）

みんな、と規則的に鳴いていたかと思うと少しの空白が訪れ、詰まったかのように夏の風物詩である蝉が再び声を上げる。

そして私はこれまた夏の風物詩である棒アイスを両手に持っていた。私は庭を視界に入れながら、縁側で日向ぼっこでもしているだろう。俺様天使のもとへと足を進めている。

早く行かなければアイスが溶けてしまふ。そんなことを思いながら足早に歩を進めると、縁側に直ぐ到着する所で、ぎしりと小さく下の板が軋んだ。

その音に気がついたらしい俺様天使は寝転がっていた身体をゆっくりと起こした。

俺様天使のお腹の上で同じように日向ぼっこをしていたスズメが振動に吃驚したように左右に首を振って庭の木へと飛び去っていく。

俺様天使は木の枝に留まっているをスズメをちらりと見た後に、綿菓子のように、ふわふわとした金髪を揺らすと悪戯を思いついたように瞳をにんまりと細めた。

「おい人間、お前太ったんじゃないかねえのか？」

「マジくたばれ」

廊下が軋むのは古いせいであって体型のせいじゃない！

片手に持っていた棒アイスを反射的に俺様天使の腹立つ顔面目掛けて剛速球で投射すると、きょとんとした表情の俺様天使を見て私は、予想通りに顔面に当たるかと思い内心でガッツポーズをした。

だが、勝利の雄叫びならぬ感動の笑いが零れる筈だったのが私の口からは、別の言葉が出て来た。

「・・・は？」

「いつも抜けてる顔が更に間抜けな顔になってるな」

「うつさいわ！それよりもちよ、ちよつと待って！え？ええ、ええええ！？何が起こってる訳これ！？」

私が声を荒げたのは仕方がない理由がある。人差し指で恐る恐るその現象を指さした。

満足そうに笑う俺様天使の顔の前で、私が投げ付けた棒アイスは重力の存在を忘れたようにそのまま空中で停止している。いや、若干上下に不規則にふよふよと浮いているが。

これで声を荒げずに何をすれと言っただ！！

いや、だが落ち着け私。

相手は俺様だ。破廉恥で変態で、おバカさんで奇天烈な金髪綿菓子だ。

そして百歩譲って取り敢えず、多分一応は、それなりに天使なのだ。

見た目とか見た目とか見た目とか。・・・あと、精霊とか。

そこまで考えると、なんだか妙に冷静さを取り戻した。変に吃驚した自分があほらしい。

相手は俺様天使だ。もとよりコイツが異常なのは知っていただろう。

脳の巡回を終えると、宙に浮いていた棒アイスがぼとりと俺様天使の手中に収まった。

「アイスか？」

「あー、うん」

はむ、とアイスに口を付けた俺様天使を見ると、冷静さが今度は好奇心に取って代わられた。何だか気分が高揚して、うずうずしている。

すとな、と俺様天使の横に座って同じようにアイスを頬張ると俺様天使はこちらに視線を落とした後に庭の方に瞳を向けた。

「気になるのか？」

「むぐッ。」

アイスが気管に入る所だった・・・！

壊れたブリキのおもちやみたいになんか飛び上がって、そろりと私より背の高い俺様天使を見上げると、俺様天使も私を見ていた。

そのにやにや笑いがムカツクのですが！

大人気無いとは自分でも思うのだが、ムツとした表情で口を尖らせる。

自分の心を読まれた感じがして少し腹が立ったのだ。

「そんなにも分かりやすかった？」

「まーな」

ひたすら渡り行く青い空に入道雲がゆったりと泳いでいる。そんなゆったりとした動きに、太陽も雲の隙間を出たり入ったりしている。

そして、隙間から顔を出した太陽はこれ見よがしに、じりじりと世界を焼き始めた。

塀に巻き付いている赤い色と青い色のアサガオが光に照らされて地面に小さなゆらゆらとした陰を作った。

縁側は陽が当たる場所なのだが、私は俺様天使の陰の中に居たから肌を焼くことはなかった。

ちなみにこの俺様天使は、いくら陽に当たろうとも肌の色に変化はない。

勿論、肌が焦げ茶になることはないし、赤くなることもない。非常に羨ましい肌の持ち主なのだ。

太陽に思わず瞳を細めながら、竹で作られた簾をそろそろ準備するべきか。と思索し、夏独自の熱さに手で自分を仰ぎ風を作ろうとしたが全くもって意味がなかった。逆に熱くなった気がする。

まあ、ここは山の中の田舎にあるから、都会よりも大分涼しいのだが。

でも今日は異常に暑いなあー・・・。

アイスで体温を下げようともう一度かぶりつくと冷たい風がふいに通り抜けた。

クーラーのような冷気を含んだ風。

思わず目をぱちくりさせると、横からくつくつと喉で笑う声が聞こえポカンとした表情のまま見上げた。

「ぶッ、変な顔」

ぐにーと、私は俺様天使に頬を引っ張られた。

「やべえ超おもしれえ。良くのびる頬だなー！」

「まひ、ふたはれー！」

「あア？なに言ってるか分かんねえなあ」

マジ、くたばれって言ってるんだよ！畜生さつさと手を離せ！アイスが溶ける！！しかも私が何を言ってるのか分かってんでしょその顔！

アイスを持っていない手で俺様天使の右手を抓るとしゅしゅとアヤツは手を離れた。

ちなみに俺様天使はもうアイスを食べ終わったらしい。アイスを包んでいた紙に棒が包まれている。

「涼しいだろ？」

「・・・・・・まあ、うん」

そう、確かに先ほどからヒンヤリとした風に身体が包まれているように、暑さが引いていくのだ。頬を引っ張られたのが腹立つので、長い沈黙の後に頷いた。

「これも、精霊の？」

「あア。風を司っている精霊の力だ。だから俺様に感謝しろ」

「いやいやいや、感謝すべきは精霊にでしょう！」

胸を張って偉そうに言う俺様天使にそうやって突っ込むと俺様天使は首を傾けた後に、嘲笑を浮かべた。

「精霊は俺様に力を貸したがってんだよ。んで、俺様に力を貸せて満足している。人間も涼しくなってる嬉しいだろ？つまり最終的に

は感謝されるべきは俺様つつうことだ」

そんな屁理屈がまかり通ると思っっているのだろうかこの俺様天使は、ぐりぐりと米神を解して、食べ終わったアイスを紙に包んだ。

棒アイスをゴミ箱に放り投げて、つきあつてらんないわと肩をすくめ縁側の真ん前にある部屋で小さな机の上に青色の薄っぺらいノートを開いた。

言わずとも知れるが、いわゆる「夏休みの宿題」に該当するものである。

青色が指し示す教科は例に漏れず数学だ。

シャーペンを右手に持ち、人差し指で押すと親指の上を綺麗に円を描きくるりと回った。

ノートに印刷されている円の中に収まっている三角形のそれぞれの辺の長さを求める図を暫し眺めた後に、シャーペンを走らせた。

\sin \cos \tan

こんなものが、本当に日常生活で役に立つのだろうか。

そんな疑問を腹の奥に押し込めてただ、目の前にある数学の課題たちに集中した。

(・・・・・・。)

ああもう煩いよ俺様天使！アイスなら勝手に食べて良いから自分ですりに行きなさい！！

イライラが噴火し、反射的に消しゴムを振りかぶって投げつけた。

(へぶっ)

(あれ、・・・あたった)

私は、きちんとアイロンを施した清秦おじいちゃんに借りた服をオレンジ色の袋に綺麗に仕舞い込んで壁にかけられた古い時計に視線を一度向けた。

「清秦おじいちゃんに借りた服を返しに行ってくるね」

「ああ？清秦のジジイの所に行くのか？」

「うん。一昨日服を借りたでしょ？アイロンもかけたし、今日の勉強も終わったし。」

青色のノートがパタンと閉じられて、ひっそりと机の上に置かれている。

裏口に鍵をかけたし、戸口の確認もした。

靴箱の上の小さな藁籠の中からうさぎのキーホルダーがついている鍵をひっぱり出した。

サンダルに足をとおそうとした所で、履き慣れたサンダルの横に、一回りも二回りも大きい真新しいサンダルが並べられているのを目を落とし、何だか面白いような、くすぐったいような温かいような胸焼けしたようなよく分からない思いに駆られてしまって俺様天使にそんな感情を悟られないように、先に玄関の扉をくぐり抜けて。

広がる眩しい世界に、反射的に瞳を細めて手で陰を作った。

数回通った同じ森の小道を今度は二人並びながら歩を進める。

蝉や、鳥、色々な生き物の声が耳にすんなりと入ってきて、森に立ちこめるこの香りや色や音が、昔、それも私が凄く小さいときと全く変わってないことにふっと気がついて一人啞然とした。

いつからだろう、小さい頃に夏が来ては、はしゃいだ森だったのに。麦藁帽子をかぶって、水筒をぶらさげて。

大好きだとみんなに公言して憚らなかったのに。なんでだろう、この森を忘れてしまったのは。どうして、大きくなってしまつと、小さかったころの大好きを忘れてしまつんだらう。

生き物だけではなく、小さな水のせせらぎも森の音を奏でて。

背の高い木々を植物の蔓が首飾りのように巻き付き飾り付けている。

一つの木が、伸びた蔓や小鳥の小さな宿り木となって、足下の苔や小さな虫たちの傘となって。そんな一つの木々が集まって森になっている。そうして生まれた森はまた、一つの木を育てているのだらう。

光に照らされて輝く黄緑色の木の葉と風が遊ぶのに呼応するように影が不規則にゆらゆらと形を変えていった。

大地を踏みしめたサンダルが、地面のでこぼこにつられるように傾いたりする。

緑で覆われた道に入ると、草独自のふわりとした感覚が足の裏に伝わってきた。

木の葉の隙間から零れる陽から逃れるように俺様天使の反対側に回り込むと、訝しげな顔をしていたが何も言われなかった。

緑のトンネルを、くぐり抜けそつと上を仰ぎ見ると驚くほどに青い空が視界に広がって私は胸一杯に息を吸い込み、どこまでも広がっている世界にそつと俺様天使を隠れ見ると、眩しそくに瞳を細めて白い手で太陽を翳していた。

その視線の先を追ってみるけど、どこか違っていているように思い、いてもたってもいられなくなって吸い込んだ空気で、大きな声を空へと向けた。

「空は繋がってるー！」

「・・・ああ？なんだ急に」

私の大声が空にすつと溶けていく。今のも森の一つになったのだろ

うか。

俺様天使は、訝しそうに私を見下ろしている。眼が語っている。頭でも沸いたのかこの人間は、と。

それはただの被害妄想だ、と言ってくるヤツもいるだろうが、その被害妄想の確率は1%もない。いや、1ミクロンもない！！ミジンコよりももつとない。

「ちよつと叫びたくなっただけ」

そうやってちよつと笑って俺様天使を追い抜いて、もう一度、空を見上げた。

けれど追い抜かしたと思ったら、もう追いつかれている。本当に長い足ですること。

神は二物を与えないとかいうけど、コイツは二物どころか三、四と与えられていると思う。ああ、だけど、なにゆえ性格の良さ・・・、つまりは謙虚さとかを与えてなかったんだろう。

つつか、顔良し、スタイル良し、性格は・・・、まあ言及しないこととして。ああ！ほんつとくに憎たらしい。足は長いし綺麗な形してるし！アンタはシカか。というか私とのコンパスが違い過ぎるだろう。

私の三步がコイツにとっての二歩じゃないの？よくもまあ私のペー
スに合わせられるね。

やれやれと肩を竦めた所で、はたと固まり足を止めた私を俺様天使も二歩進んだ先で足を止め、こちらの様子を伺っている。

だが今の私にヤツを構う余裕もとい暇は無い。

いやいやいや、ちょっと待て。

よくも まあ 私の ペースに 合わせられるね ？

もう一度脳内でゆっくりと巡廻させ、あんぐりとした顔で俺様天使を見ると俺様天使は、ぴくんと眉を跳ねらせて「さつきから一体何だ」と、腕組みをしていた。

まさか、

いや・・・、まさか、・・・まさかさ、今まで

・・・今まで一緒に歩いてたとき、ずっと

私の瞳に、俺様天使の碧い瞳が映った途端、ぼふんと、頬に熱が走ったかと思ったら、

脳内回路がショートして、私は思わず「ぎゃあああ！」と叫びなが

ら駆けだした。

（気を使って、くれてたの？）

「急に走り出すとか一体なんなんだ？」

ぼふつと真っ赤になってから「ぎゃあああ」と女にあるまじき叫び声をあげながらもの凄い勢いで離れて行く人間の背中を呆然と眺めながらポツリと零す。

「つつか、あんな感じの獣ベステイアいたよな」

逃げるように走り去っていった彼女の後を、彼は、ゆったりと追った。

見慣れた景色の中、色とりどりの朝顔があぜ道にも広がっている。

「清秦おじいちゃん!!!」

イノシシ扱いを密かに俺様天使にされてるのを知らなかった私は、どたばたと庭へ飛び込むと、茶色の麦わら帽子をかぶってた清秦お

じいちゃんが、気がついたように小さく肩をゆらし顔をあげた。

「おお、こんにちは」

籠を持ち直して、きよとした後に、にこりと私に微笑んでくれたが脳内では未だに先ほどの新事実がぐるぐると回って尾を引いており何時もは安心できる笑顔も今回は、ほっと一息吐くことができなかった。

とりあえず、この頬の火照りは走ったせいだ。うん、そうに違いない。

肩で大きく息を吸いながらぶんぶんと頭を振って、清秦おじいちゃんに包みを見せ、首を傾けられる前に「服ありがとございました。」とお礼を言つて縁側にそつと置いた。

慌てているような私に、清秦おじいちゃんは別の意味で首を傾けた。

「急いでるのかの？」

「えっ！？あ、いえ別に急いでるっていうわけじゃないんですけど・・。」

なんていうか、ともごもごと歯切れの悪い私。

だってさ、俺様天使に会いづらいつていうか！どんな顔していれば

良いか分からないっていうか！！

ああもう、なんで私がこんなにも振り回されなきゃならないわけ！

「宿題とかかの？」

「まさか！順調ですよー」

未だに肩で息をしながら、片手をぱたと横に振って冷や水のせいか、少し湿っている地面から顔をあげた。

そう、今年の宿題は順調に終わっているのだ。

なぜだか分からない。逆に不思議に思うくらいだ。

俺様天使が急に古屋に転がり込んできたことにくわえ、その俺様天使が、清廉で物静かとは言い難い性格だったからだ。

つまり、四六時中うるさい。

ことあるごとに「アレは何だコレは何だ」攻撃が始まるのだから。

私が、勉強できる静かな時間がとれるわけが、

・・・ない？

・・・ほんとうに？

突然、後ろから頭を一回コツンと叩かれた。

「あだっ」

「ったく、俺様を置いてくたあどついう了見だ」

「ちよつと脳細胞減ったらどうすんの！！」

「あア？」

俺様天使の登場に、先ほどから中々ひかない熱がさらに上がっているのを実感した私は

きゃんきゃんと噛み付くように喚きながら下から俺様天使を睨み付けてると一度眉をひそめ、私の頬をひっぱった。

「ひよつと！はなへー！！！！！！」

「ああ、やっぱりな。なんでこんなに伸びんだろつなア？」

「おやおやまあまあ、それくらいにしてやったらどうじゃ？」

頬を引っ張られながらも何らかの逆襲をしようと背伸びしながら俺様天使の頭を

叩こうと背伸びしていた所で、清秦おじいちゃんがタオルで汗を拭いながらそう言つと、俺様天使はこちらが拍子抜けするくらい素直に手を離れた。

いつもそんなくらい素直だったらしいものを。

「もし暇じゃったら、一緒にどうかの？」

「なにをだ？」

頬をさすりながら私も返答を待っていると、清秦おじいちゃんは籠の中から手袋と鋏を見せて、にこりと笑った。

「清秦おじいちゃんー！オクラ採っちゃうからねー！」

私は鋏を片手に、緑色のオクラに手を伸ばした。

細長い枝の枝元に、5センチ程のオクラが3つ出来ている。

オクラをよくよく観察してみると、根本が黄緑で先にいけばいくほど緑色が濃くなっている。

つつんと痛い繊毛を突いていると、遠くにいた清秦おじいちゃんが、親指に人差し指をつけ円を作った。

私も笑いながら同じ動作を返す。

ぱちん、ぱちんとオクラを切り取り、大きめの籠の中に放り投げた。

ここは清秦おじいちゃんの畑の一つである。

トウモロコシや、トマト、オクラなどの夏の野菜を作っているのだ。

ちなみに、俺様天使はトマトの収穫最中だった。

普段ごろごろしてるから、仕事に駆り出されて良い様だ。だなんて思いながらある意味ではありがたかった。落ち着ける時間がとれたからだ。

清秦おじいちゃんに「かぶつたらどうか？」と差し出され、一度はその申し出を断った麦藁帽子で、ぱたぱたと自分を扇いだ。なぜ断ったにあるのか？という疑問の返答は簡単だ。

「清秦のジジイの通りだ。ぶっ倒れたらどうすんだ人間」

そう言つて、俺様天使が無理矢理かぶせてきたからである。

嫌がらせか！嫌がらせなのか！！ちよつとあんたが気になってる私にそんなにも追い打ちかけたいのか。

恨みやら照れやらを、ぐつちよぐちよに混ぜ合わせた視線を俺様天使に突き刺すと、綿飴のような髪が太陽の光を反射して蜂蜜のようにしっとり、それでいて軽やかにきらきらと輝いた。

そして、俺様天使は採ったばかりのトマトを片手にこちらを振り返って、本当に、本当に楽しそうに笑った。

・・・初めて見た無邪気な笑顔

ちよっと、その顔でその笑顔は殺人級でしょう！

思わずしゃがみ込み膝に顔を埋め、内心で喚いた。

「へ？」

「祭りだア？」

「やっぱりの、知らなかったか。」

ほわりと微笑んだ清秦おじいちゃんに一瞬こちらも、ほわりと緩んだ微笑みを作りそうに

思わなくなったが、視界にちらりに入った俺様天使のニヤリとした笑顔を見つけてしまい顔をひきつらせることとなった。

思わずぶるりと小さく背中が震える。今までの勘が告げている。ぜってえヤツはキラキラな瞳をしていると。無理無理無理、あんな瞳を見たら。コイツと目を合わせたら負けだと。

知らない見ない誰も居ない聞いてない、つまり見ざる言わざる聞かざる居なざるを心のなかで繰り返す。

祭りは雰囲気が好きだがそうまでして行きたいとは思わない。

屋台の食べ物もなんだかんだで高くつくし・・・というか、俺様天使と一緒に行きたくないというのが本当のところである。

あんなキラキラ目立つ奴といたら、平凡な自分がなんだか悲しくなる。周りの目が痛い。

そんなシーンを脳内で巡らせてみると無意識にひくりと口元が引き
攣った。

「ないないないない。マジでそれは無い」

「なにがないんじゃ？」

「う、え。あ・・・独り言です。あは」

軍手を丸めている清秦おじいちゃんに私は日本人的笑いを零し有耶
無耶化を図った。

私のこれ以上聞かないでオーラを感じ取ったのか清秦おじいちゃん
は口を閉ざしたが、空気が読めない某アホ天使がいることを忘れて
いた。

脳内デリートしても良いだろうかと神に問いたい。

「よし、人間！祭りに行くぞ！」

「忙しいから清秦おじいちゃんが行ってきなさい」

予想道理に降ってきた台詞を命令口調でズバっと切り捨てると、俺
様天使はム、と口をへの字にした。

いい大人がなんて子どもっぽいことしてるんだ。

まったく、そんな顔してもちつとも可愛くないしぶさいくな・・・
ああもうマジ顔良いと得だよな！

半眼で睨みつけると一瞬だけ狼狽える素振りを見せてから、俺様天使はハンと鼻で笑った後に偉そうに胸を張った。

「俺様が決めたんだ。従え」

「ねえ、バカなの？バカだよねアンタ？」

なにが俺様が決めたんだ、従えなのか。訳がわからない。斜横思考は止めてもらえないだろうか。

「清秦おじいちゃんへ行けば良いじゃん。そりゃあ清秦おじいちゃんが暇だったんだけど」

「あア？清秦のジジイは無理だろ。余計な力を使わ」

「何を言っておるんじゃ」

後ろから言葉がかけられて続く言葉を遮られた俺様天使も私と同じように振り返ると清秦おじいちゃんがお盆を両手で支えていた。

上には麦茶と三つのコップが用意されていた。

冷蔵庫から出されたばかりなのだろう、露点に達して水滴ができている。

きんきんに冷えたって感じた。

「ほれ、冷えてるぞ」

「ありがと」

両手で受け取り口をつけると冷い麦茶が齒を一瞬しびらせ喉を伝つてお腹に渡って行くのを神経が捉える。コップから片手を離すと案の定、手の平が水滴で濡れていた。

「なんの話しをしておったんじゃ？」

「祭りに行くって話だよ」

「いや、纏めすぎでしょそれは！えっと、こいつが清秦おじいちゃんと一緒にいきたいみたいで」

「俺様に付いて行きたいの間違いだろ？」

「はいはいはい。で、どうですか？」

「すまんの、一緒に行けんのじゃ」

「ううん！こつちこそ急になんかごめんね」

心のうちで激しく訳もわからない罪悪感に苛まれていると俺様天使が関係なさげにお茶を啜ってから端整な顔にニヤリという微笑みを浮かべのを見てしまい、私はがっくりと肩を落として訪れる未来を思い浮かべ顔を覆った。

断れない私も私だよな！って自分に突っ込んだのは道理だと思う。

冷蔵庫を開けると清秦おじいちゃんの畑でとれた少しいびつな形をしていた大きなトマトと小さなトマトが、鮮やかな赤で存在感を主張している。

なんだか、チグハグだなあって笑って麦茶を取り出し、戸を閉めた。

暑い。今日は果てしなく暑い。

首筋を伝う汗を乱暴に水色のタオルで拭い保冷剤を首の後ろに充てがいなおした。だが、保冷剤の氷が首の体温と外気によって溶けかかっていたのか、呆気なくそれはぬるくなった。

タオルを首にかけ手元で液状になった保冷剤を遊ばせながら溜息をついて横を見る。

「アンタは本当よくもまあ寝れるわ」

縁側で丸くなってグースカ寝てる金の綿飴。

もう分かっているだろうが、自称ありがたああい天使だ。

若干ぶすくれながら、綿飴みたいな髪を恐る恐る手で撫でると、俺様天使の髪が想像以上に柔らかく指通りが最高だった。

絡まることを知らないってこういうことなんだなあと、数十秒の間

その柔らかさを堪能させてもらった。

「・・・・・・・・」

私は、ぴくりとふいに跳ね上がった手を俺様天使からゆっくりと離し、上を見上げた。

空には清々しい青色のキャンパスを入道雲がゆっくりと形を変えながら流れ去り、澄み渡る青と森の緑と白い雲。三色のコントラストを太陽から零れ落ちる光が鮮やかに彩りを添えている。

瞳を閉じると、みんなと蝉の鳴き声が聞こえ木の葉のざわめきとともに風が通り抜ける。

みーん、みーんと蝉の鳴き声が頭の中に響き私はハッと眼を開けた。

「・・・・寝ちゃったんだ」

しよぼついた瞳できょろりと横を見ているが傍で寝ていた俺様天使の姿は無く、手持ち無沙汰に団扇へと手を伸ばした。寝る前も思ってたけど暑い……。しかも寝起きだからさらに暑い。

ばたばたとうちわで扇ぐが生ぬるい風しか届いてこない。なんてことだ。

ううー、と唸りながら青臭い畳に倒れ込むと仄かにひんやりとしておりそのまま寝転がることにした。あ、ささくれてる。

うちわを放りだして体から力を抜いた、のだが。

「だあああ！暑い！！」

即座に温くなった畳から振り払うように上半身を起こしあげ私は、押し入れから鞆を取り出した。机の上においてから洗面所へ行きタオルをつめる。

そして廓すなわち台所にある冷蔵庫の中から冷えた麦茶を氷と共に水筒の中に注ぎ入れる。

「よしっ」と

「どっか行くのか？」

鞆のチャックを閉めた所で、姿が見えなかった俺様天使が廊下の向

こう側から声をかけながら近づいてきた。

「川行かない？」

「川？」

「うん。清秦おじいちゃん家の近くに川があるの」

「川なア。・・・良いぜ、付いてってやるよ」

はん、と偉そうに宣うが、ただここにいたって何もやることがないだけだろうが。と思うが喉の奥に呑み込んだ。賢明な判断である。

清秦おじいちゃん家に行くとき通る森の小道を歩くが、通り抜けきる少し手前から歩くペースを緩めた。

「こつち」

「おい、そつちに道なんてねえぞ？」

「歩道沿いに行くと暑いし遠いからこつちから行くの」

しばらく歩くと木々で挟まれていた視界が急に広がって青が飛び込

んできた。

川である。

たたつと川縁に走りよって鞆を置き、済んだ川を覗き込むと太陽を吸い込んだ柔らかい水の中、魚がちろりと逃げていったのが目で追えた。

川の底にある小さな小石がゆらりと流れに抱かれている。

「綺麗な川でしょ？」

「まアな」

「よし、じゃあ遊ぼう」

「・・・・・・は？」

ぽかんとした顔の俺様天使に小さく笑ってから肩にかけたタオルで汗を拭ってサンダルをそのまま爪先から川に入れると一瞬の痺れが脳へ伝達された。

「冷たいー！！やばいなにこれ最高ー！！」

膝下二分に一ほどが川の冷たさによってひんやりと過剰なまでに保たれていた熱を奪う。

水の中ではしゃばしゃと足で水を蹴ったり掌を水面に這わせてみたりする。

両手を川に浸し掬いあげてみると煌々と陽の光を反射して色を変えつつ指の隙間からぼろぼろと虹色の涙が零れ落ちて水面とまた融け合っていた。

今度はたくさんの虹色の涙を空へと少しだけ返すと青い空のキャンパスに色鮮やかな花が舞い散った。

重力に従って落ちてくる七色の雫に包み込まれるようにして顔を綻ばせている、そんな彼女を俺様天使は川縁で座りながら、瞳を柔らかく細めて、小さく微笑んだ。

そして彼は、静かに口を開いた。

「ガキだな人間」

「・・・・・・・・」

そう言った俺様天使を内心「アアン!？」と思いながら振り返ってみると、予想と違って、俺様天使は優しい表情を浮かべており思わず羞恥に身動く。

本当なんなわけですか、その微笑ましそうな顔。

火照った体を誤魔化すように。

・・・左手にできる限りの水を溜めて、ッ持ち上げる！

「うつわー！てめ、人間なにしゃがるんだー！」

「ふふん、冷たくてきもちいーでしょー？」

かけられた水で湿った服をわたわたと摘みながら、俺様天使は目を吊り上げて、ぎゃんぎゃんと吠えかかってきた。

それに対して私は、川の方に視線を戻して俺様天使から見えないように、してやつたりとほくそ笑んだ。

「んぎゃー!？」

だが、ざりと石同士が擦れ合う音が川縁でしたと思った瞬間、背中が唐突に冷たさを感じ反射的に飛び上がった。

何事かと頬へも伝った冷たい雫を左手で拭いながら振り返って見ると、濡れた手を払っている俺様天使が珍しくニッコリと笑っていた。

「ハッ、冷たくて気持ちいいだろう？」

「（む、むかつくコイツー！！）」

私は、浅い川の中で両足で立ち上がり前へ進むと同時に俺様天使の腕をひっぱり入れればしゃりと水が跳ねる音がすると同時に開いている右手で水をすくいあげ予感していたのか身体を締め込んだヤツにぶっかけた。

暫しして、ぽたりと、蜂蜜色の髪から雫が滴り落ちた。

・・・・・・・・小刻みに俺様天使の肩が震えている。

「・・・・・・・・いい度胸だ人間」

地を這うような低い声と共にゆらりと顔をあげた俺様天使の翠色の瞳の濁りを捉えて私は顔を青く染め上げ瞬時に警戒いやむしろ逃亡体制に入った。

そして響いた音は、二人の叫び声。

（テメエマジふざけんな！！濡れただろうが！！）

（アンタが追いかけてくるのが悪いんでしょうが！）

（んなもん知るか！転ぶなら一人で転べ！！）

（ハハンツ、道連れ万歳！！）

私が、ふと廊下の角を曲がると、俺様天使が眼に入ってきた。
ヤツはいつもの縁側で大の字になって寝転がっている。

今日は、それ程暑くないし、廊下が冷たいせいもあるのだろう。寝苦しそうな様子は欠片もなく、ぬくぬくしてるような、へらへらしてるような幸せそうな表情で。
ふつと自然に頬が緩んだ。

「本当にここが定位置だなあ……。」

私は俺様天使に群がる小鳥たちに小さく微笑を零し、よつと本人をまたいで部屋に入り、お気に入りのタオルケットを取って、ゆっくりとお腹にかけてやる。

小鳥たちは、やはりチラリとこちらを見てきたが、すぐに何ともないように黒々としたつぶらな瞳を閉じた。

「……おやすみ」

そつと囁いて、ふと視線をあげた先で、いつのまにかいた黒猫の煌々とした瞳と視線が交錯した。

珍しい、と逸らさず見続けていたけれど黒猫はすぐに興味を失ったように光沢のある闇色の体軀を反転させて森の中へ姿を消していた。

夕日がゆつくりと大地に飲み込まれている時間、私は俺様天使となぜか街へ下りていた。
向かい側から歩いてくる浴衣姿の女の子。クレープを片手にもう片手にはリンゴ飴。

この時点で気がつくだろうが、私はさんざん嫌がっていた祭りにきている。

道路の真ん中では、きらびやかな衣装を纏った老若男女さまざまな人々が笑顔で曲にあわせて踊っている。脇道でカメラを持って写真やカメラを回す人たち。

大きなスピーカーからは実況が聞こえてくる。

「あのふわふわしたの一体なんだ!？」

夜の道を照らす街灯の傍に赤い提灯がぶら下げられていたり屋台がずらりと道を彩るように並んでいる。

「おい人間！あのガキあれ食ってるぞ！！」

見知った通りなのに、なんでか今日という日だけはどこか違う場所に感じてしまう。

「つか食い物なのか！？」

からんころん、からんころん。

「よし、人間、いますぐ俺様にあれを献上しやがれ」

はつきり言おう。私は今しみじみとこの瞬間、この祭りの熱気に溢れた雰囲気堪能していたのだ。

「だああああああああ！！！！うっさいなアンタは！！少しは落ち着きなさい！！！！」

「うっせえのはデメエだろ人間」

至極真面目な顔でそう言ってきた俺様天使に私は愕然と思わず両手で顔を覆った。

もっついやだコイツ・・・！！

浴衣の裾に注意しながらふらふらと例のあれ、つまりは綿菓子なのだが、の屋台に私は近寄っていった。

熱さに蕩けた砂糖独特の甘い香りが鼻孔を攪る。そして私は諦めの感情を多大に言葉に乗せて紡いだのだ。

「・・・すみません、綿飴一つください。」

その言葉を聞いた瞬間の俺様天使の満足そうな顔！きいあああ悔しい！！！！！！

もそもそ、と隣で綿飴に食いついている俺様天使の手の中には、焼きイカやらトウモロコシ、たこ焼き、焼きそばなどが袋に入れてぶら下げられていた。

ちなみに私の手の中の袋には、二つのぬいぐるみとビニール製のぴこぴこハンマー、小さな鳥が飾られてるオルゴール、箱にしまわれたシルバーのネックレスが乱雑に押し込まれている。

ちなみにこれらのものは、全て俺様天使が屋台で手に入れた物である。

射的、輪投げ、運試しの宝くじならぬ宝ヒモ。

射的は5発中、全てを使って最上段にあったぬいぐるみを倒すし、輪投げも3輪中、2輪がぴこぴこハンマーの札と、ネックレスの箱に命中。

一番吃驚したのが、外れも多い中で一回しかできないのに可愛らしいオルゴールを中てたことである。

「おおお！兄ちゃん凄いな！！」

と屋台のおじちゃんも吃驚しつつも言っていた。だけど、俺様天使はにやりと笑って当たり前だろう？と偉そうに返していた。

・・・よくぞ、キレなかったな屋台の親父殿。

腕の時計に視線を落とすと時刻は7時をそろそろ刻む頃。それを確認して私は俺様天使の袋の中から、たこ焼きを取りだし口の中に放り込んだ。

「うん、美味しい。って何よ？」

「あー」

「・・・いや、自分で食べなよ・・・」

私の持つてゐるたこ焼きに視線を降ろしてから、俺様天使は私の方を見て雛鳥が餌を請うようにパカリと口を開けた。微動だにせず、ひたすらその状況から動かなかった為に私は諦めて口の中にたこ焼きを放りこんでやった。

「ん、うめえな」

「・・・まったくもう。」

がつくりを肩を落としかけるが、いちいち反応するのも癪というよりむしろ疲れるだろうと思って止めておいた。

神社の境内で座っていたのだが、手にしていた袋を俺様天使の横に置いて私はたちあがった。

「ちょっと飲み物買ってくるから待ってて」

背を向けながらそう声をかけたのだが、身体が後ろにひかれて進むうとした足を引っ込めた。原因に視線をずらすと、左手が白い手に掴まれている。

きょんととして俺様天使を見下ろすと、やつは静かに、けれど焦ったように私を見上げていた。

「何？」

「行かなくても良いだろうが別に」

「私、喉かわいたんだって」

「じゃあ俺様も行く」

「いや、すぐそこだよ？ほら、あそこ。見えるでしょ？」

「……………行く」

「荷物あるし、まだ食べてるしそこにいなさいってば」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

言い聞かせるように説得すると、むううと俺様天使はそっぽを向いた。

ひたすらに頭の上にはハテナマークで一杯である。

一体こやつはどうしたんだろうか？くると周りを見回してみても、ただひしめくように沢山の人が祭りを楽しんでいるだけである。

・・・そう、沢山の人が。

あれ、まさか。

ここで私は一つの答えに辿りついた。答えというよりは、一つの推測憶測に他ならないのだが。

「アンタがウロウロしない限り、ちゃんここに戻るから」

迷子にはさせないから大丈夫だよ？ふつと頬を緩ませながら金色のふわふわの髪を撫でてみる。

「・・・・・・・・ぜってえだな？」

「うん」

「・・・待たせるんじゃないぞ」

「うん」

「・・・・・・・・」

ふん、とそっぽを向いたままの俺様天使は掴んでいた私の左手を若干乱暴に離した。

（いつてくるね？）

（ツさっさと行ってこいバカ人間やろー！！）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4608u/>

ANGEL&HUMAN

2011年11月20日05時40分発行